

---

# 哀歓傷

琉生

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

哀歡傷

### 【Nコード】

N 8 5 7 7 Q

### 【作者名】

琉生

### 【あらすじ】

彼女にとって“証”は、誇りであり、喜びもあり、哀しみの塊であり、全てだった…。【アイコンショウ】アナタは証を刻んだ事をありますか？ やや残酷なシーンを含みます。 / 2 0 1 1 /

2 / 1 2 /

学校から帰ると、シトシトと雨が降り出した。

そのお陰で、雲が太陽を覆い、人間にとって一番大切な光源の光を遮った。

だが、全てを遮った訳ではない。だから、外も自分の部屋も薄暗くなった。いくら電気で明るく照らされているこの部屋の中でも、遮ぎられる前と比べて明るさは無くなった。

普段の私なら、この微妙な明るさは大嫌いだ。

でも、今の私にとってこの明るさは半端なく心地いいものだった。

心地いいと言っても、そのままな訳にはいかない。

明日も学校がある。

明日提出する宿題をやらないといけない。

通学鞆から勉強机にバンバンと教材を投げ出す。そして、キャスター付きの椅子に座り、ペン立てからシャーペンを取りだそうとした時に、ふとペン達と同じように立っている鋏に目が行った。

(……………忘れてた。)

私は鋏を見て、すぐに思い出す。

私以外に誰もいないこの家の中であることを。

私にとって、もっとも喜ばしい行為を。

シャーペンよりも、鋏に手を伸ばす。

緑の持ち手を親指と人差し指で摘むように取り出す。

そして、これ以上開かないというところまで、刃を広げた。

それを右手に持つ。緑の持ち手ではなく、片っぱの刃をもつ。  
それから、明るい光の下、夏の日焼けが抜けきれていない少し茶色い左腕を出す。腕は皮膚の薄い裏ではなく、表をだ。

用意はできた。

だから、私は右手を動かす。左腕の方に。……否、左腕にか。

刃は私の腕に垂直に落ちてきた。

ただ落ちてきたのではない。かなりの圧力を持って落ちてきたのだ。  
証拠もちゃんとある。

現に脂肪に刃が埋もれている。

こんな事を平然と見て語っている私。  
冷静というのか、異常というのか。

それから、埋もているだけの刃をゆっくりと下へ引く。  
埋もれていた時よりも、大きい圧力になってから下へ下へ。

スウーと滑らかにいうべきか、ズズズズツツと突っかかるように  
いうべきかはわからないが、ある程度に進んだ。

だから、脂肪に埋まっていた刃を脂肪から解放した。

「……ハア。」

と溜息を思わせる程の二酸化炭素を口から出す。  
体からフツと力が抜けた。

力を失った体は、後ろの背もたれへ倒れていった。同時に机の上にあつた両腕も引つ張られ、力なく机からダランと引つ張られるような感じで落ちてった。

それが、とてもゆっくりに感じた。

ダランとなった両腕、体、そして首も。

顔が上を向いていた。

何もない天井。

見えてもなんにもならない天井。

眼球は薄暗い部屋の天井を映し、鼓膜は雨音で震えている。

暫く、そのままだったが、ダランとした右手にはまだ刃が握られていた。

もう、いらない。

要らない物は要らないのだ。

右手にある鋏を机のバツと投げ捨てる。

丁度、ノートにあつて激しい音が出た。

… その音の余韻が残る中、左腕を顔の前に持ってくる。

腕には、綺麗な「一」の字。

太さも長さも適度で、我ならよく出来ていると思った。

「一」を右手でなぞる。なぞると一気に溢れ出す。

ああ…。…よかった…。

ちゃんといた…。

ちゃんと…。…よかった…。

とてつもなく膨大な安堵感。

『今日も生きている』と感じている事。

腕に綺麗な証がある事を誇らしいと。

カッターで証を刻んだであろう、年上の友達達と同じでカッコイイと。

嬉しかった。

証が刻まれた腕も、証自体も、年上の人達と並んでいるような感じ

も、証を刻み楽になっていくことも、存在しているんだと確証が得られる事も……。

全てが どうしようもなく 誇らしく 嬉しかった。

でも、でも、それでも…彼女には。

この証を刻んだ後の安堵感などの後に、最終的に訪れる物は …。

彼女は安堵した後、力が無くなっていた体は、元に戻りなり、宿題をする為に体を起こす。

教科書とノートを広げ、宿題をするぞと意気込みノートに書いていく。

すると、2、3行かいた時に…ポタツ、ポタツと水がノートに落ちシミを作った。

落ちたかと思うと、彼女は机に伏せた。

彼女は頭の上あたりで、右手は左肘の上あたりをもつように、左手は右肘の上あたりをもつように組み、長袖の袖を驚掴む。ご以上でない程、袖を握りしめた。

「……………ああー！！！！！」

彼女は泣き叫んだ。

出したこともないような声を出しながら、次から次へと溢れ出す涙を流しながら、ガタガタと震えながら。

ノートにドンドン染み込む涙と、机に跳ね返る泣き叫び出た声は、本当の彼女のような声だった…。

…  
証を刻んだ後の最終的に訪れる物、それは……証の疼きだった。



【終】

（後書き）

アトガキ

読んで下さって

ありがとうございます><!

若干、実話を踏まえた作品になりました。

なんとなくでもいいので、何か心に残ればなっと思います。

ありがとうございました！

琉生

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8577q/>

---

哀歓傷

2011年10月6日22時02分発行